

## 順応型住宅の研究

東京大学 鈴木研究室

### まえがき

この研究が目標とする「順応型住宅」とは、居住者世帯の独自の要求に順応するため、居住者自身により住戸内の平面構成を変更することが可能なように作られた住宅である。これは、住様式の多様化傾向と、住要求の時間的変化に対応することを意図した住空間に対する提案であるが、同時にこれは、画一化しつつある現代の集合住宅に居住者の個性の表出をもちこむことを意図したものである。

内部間仕切の変更を提案しようとする直ちに、工業化工法と結びついて「可変化」とか「内装部品化」に短絡し、それが目的化するという危惧を感じる。しかし、順応型住宅の目的はあくまで、生活と空間の対応を目的とするものであり、そのためには、生活の的確な把握の上に立ってこれとの対応において住空間のあり方が追求されねばならない。順応とはあくまで生活への順応である。

この研究は、二つの側面から行なわれた。一つは生活実態調査であり、これは住様式の多様化ならびにその変化の様相を把握しようとしたものである。もう一つはモデルプランの作成を通じての検討であり、これは順応の手法ならびに空間構成のあり方を追求しようとしたものである。この両面からのアプローチが、実はまだ一つの合致点に到達したわけではなく、それぞれ別個の追求にとどまっている。今後さらに幅広い層に亘っての住様式を追求することともに、プランをより具体化して、この両者の統一をはかる必要がある。

なおこの研究は、東大鈴木研究室を中心に行なわれ、研究委員のほか多くの研究室在籍者の協力をえ、さらに日本住宅公団東京支所の方々の参加をもえたものであることを付記する。

### 目次

#### まえがき

#### I 公団住宅における住み方プロセスの調査分析

1. 調査の目的と方法
2. 分析の方法

#### 3. 調査結果の要約

#### II 順応型住宅モデルプラン

1. 順応型住宅の意義
2. 均質型と分節型
3. その他の順応型住宅

## I 公団住宅における住み方プロセスの調査分析

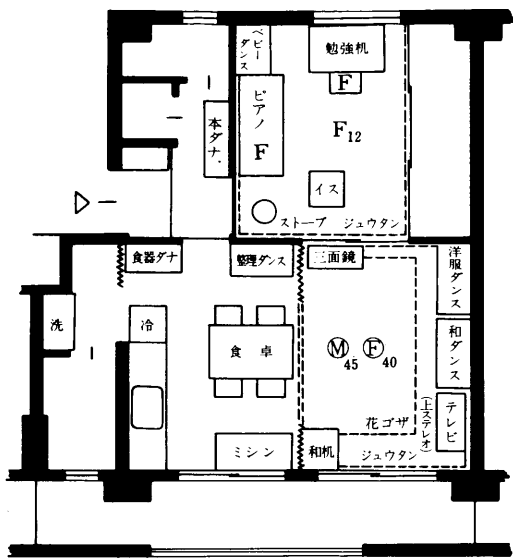
### 1 調査の目的と方法

家具の大量普及ともなう住み方の多様化は、既に数年前から指摘されている現象である。これに対して、昭和20年代に公共住宅の標準設計として設定されたDK型住戸プランは、旧態依然のままである。住戸計画の固定化は、公共住宅のみならず広く民間のマンション等にも波及している。

このような状況から抜け出そうとする動きが、最近ようやく住宅公団等に見えてきた。「居住者の個性に応じて住宅のしつらえを変えられるようにする」という考え方は、新しい住戸計画の方向の一つである。これは、セルフエイド系の導入によって、住み方の多様化への対応をねらったものである。

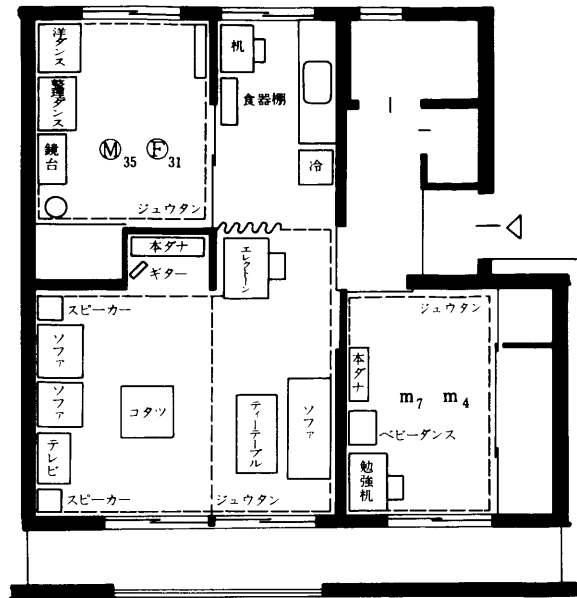
このような住戸計画のオープン・プランニング化は、単に白紙の空間を用意しておけばよいというわけではない。オープン・プランニング化によって住生活の多様化に応えるためには、有効に働くセルフエイド系のシステムが設定されなければならない。また、用意される空間は個性的なしつらえを触発するものでなければならない。

このような計画課題を考える基礎として、現実の生活における状態と可能性をさぐるために住生活実態調査を行なった。調査では、住生活の多様化傾向の実態を把握すると同時に、入居後の住み方の変化の実態を把握することに主眼を置いた。これは、住戸計画を限定した一時期における生活と空間の対応として考えるのではなく、一定の期間における生活の変化と空間の対応として考える、という計画的視点に基づいている。



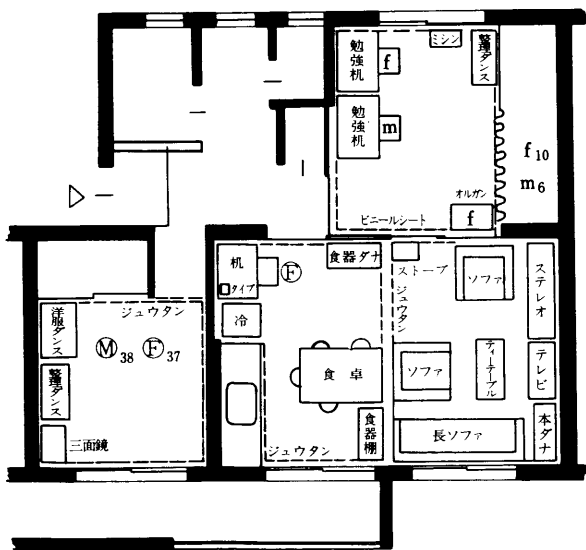
2DK, 家族3人 (M<sub>45</sub>, F<sub>40</sub>, F<sub>12</sub>)

入居時は南6畳に3人とも寝ていたが、後子供が北の部屋に分かれ、勉強机・ピアノを購入して私室化した。南6畳はきれいに整えられているが、DKとは一体化して居間となり、夫婦寝室の独立性は乏しい。DKとの間の間仕切はアコーディオンドアに変更された。



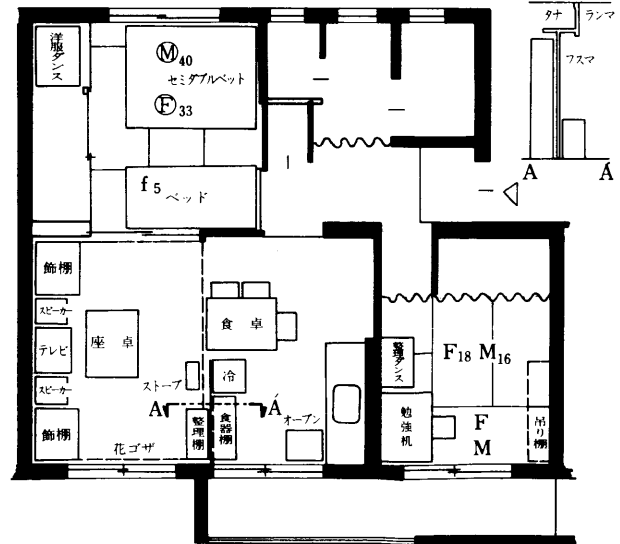
3DK 家族4人 (M<sub>35</sub>, F<sub>31</sub>, m<sub>7</sub>, m<sub>4</sub>)

DKと南6畳は完全に一室化し、ふすまは取りはずされ、カーベットの敷きつめ、居間兼食事室となっている。ソファ・テーブルと同時にコタツも置かれ、和洋の中間的な様式となっている。押入は改造されている。入居時に両親といっしょに就寝していた二男も分離し、南6畳は兄弟2人の部屋として独立しつつある。



3DK, 家族4人 (M<sub>38</sub>, F<sub>37</sub>, f<sub>10</sub>, m<sub>6</sub>)

南6畳はDKとひとつながりの空間の居間となり、次第にソファ、テーブル、ステレオなどがととのえられてきた。このため、以前この部屋にあった洋服ダンス、整理ダンスは南4畳半に移され、夫婦寝室は窮屈になっている。北6畳の子供の部屋には勉強机が購入され、次第に二人の私室として整備されつつある。姉弟が並んで寝るとケンカするので押入を二段ベッドにしている。DKの机は主婦が和文タイプの内職を行なう。居間以外の部屋は雑然としている。



3DK 家族5人 (M<sub>40</sub>, F<sub>33</sub>, F<sub>18</sub>, M<sub>16</sub>, f<sub>5</sub>)

DKは椅子式の食卓、南6畳は座卓を中心に居間としてきれいに整えられ、DKと6帖間のフスマの位置をずらすなど、細かい工夫が加えられている。入居時から移動はほとんどなく、住み方は安定している。ただし、末子が生まれたので、5才の現在も夫婦と同室に寝ている。南4畳半は姉弟2人の私室となり、押入の改造などが行なわれているが、既に18才、16才に達しているにもかかわらず、分離できない状態である。分離するためには、領域構成を全面的に変更しなければならぬ。居間重視の意図は明確で、楽しい感じの住み方であるが、それだけ就寝・私室に無理が生じている。

図-1 住み方の代表例

調査対象は、入居後5～8年の団地から選び、住戸タイプは2DKを2タイプ、3DKを4タイプとりあげた。調査戸数は各住戸タイプ毎に無作為抽出で30戸ずつ合計180戸選定したが、そのうち調査への協力を得たのは111戸(61.7%)である。調査の実施は1973年11月である。

調査の方法は、以下のとおりである。

- i 住み方とそのプロセス、所有家具に関するアンケート調査。
- ii 家具配置、寸法の実測及び展開面のスケッチ。
- iii 住み方の変化、家具の配置がえ、模様替えの内容と動機に関するインタビュー。

## 2. 分析の方法

調査分析にあたって、二つの方法をとった。一つは、住戸の各室がどのような領域に分化しているかをみたもので、これを「領域構成」とよぶ。入居時の領域構成と現在のそれとを較べることにより、この間の住み方の変化をみることができる。領域は次の5種類を設定した。

L ……公的領域(居間, DK)

L(P) ……公私重層領域(就寝に転用される居間)

P ……私的領域(私室, 就寝室)

S ……特化領域(就寝室から分離した私的領域。書斎, 家事室, 勉強室など)

N ……中性領域(日常生活行為の営まれない室。納戸など)

註: この他、2つ以上の領域が混合する場合がある。

他の一つの方法は、入居時から現在までの間の家具の移動と就寝の移動についてみたもので、これを「調整移動」とよぶ。移動は領域構成の変化にもなって起る場合が多いのは当然であるが、かりに領域構成の変化がない場合でも、部屋の広さの調節の意味でタンス類を他の部屋へ移動することもきわめて多い。

## 3. 調査結果の要約

住み方プロセスにおける調整移動は、一般にきわめて多い。とくに子供が幼時から小学生の頃までの成長期には、ほとんどの世帯で何らかの調整移動を行なう。子供が学齢以前の時期の就寝移動は夫婦の分離が多く、これは主寝室の狭さによると思われる場合が多い。これは、3DKにおいて顕著である。また家具の移動のうちの約7割は領域の性格づけに積極的に寄与するものでないタンス類の移動であり、これは単に部屋の広さの調整のために行なわれるものと思われる。間仕切そのものを移動することができれば、より領域構成に合致した家具配置を実現しうるものと思われる。

住み方プロセスよりみると、2DKと3DKでは住み方の傾向がかなり異なることがわかる。2DKでは、公

私が空間的に明確に分離する型は少なく、居間が就寝に転用される。これは明らかに住戸規模の狭小による圧迫ではあるが、この規模内におけるプランニングの理念としては一応妥当性をもつものと思われる。

これに反し、3DKでは1室付加されていることにより領域構成にゆとりが見られるが、1室の付加が十分に機能していない場合も多く、むしろ室の細分化の矛盾が浮彫りにされている。これを要約すると次のようになる。

(1) 長子が学齢以前の段階では、室の用途変更が多く見られる。これは、無性格な室の細分化によるところが大きく、このように室の用途が定まらないことは住生活の安定性を損なうものである。また、夫婦分離の就寝形態も主寝室の狭さによるところが大きく、室の細分化による歪みとして指摘できる。

(2) 長子が小学生の段階では、3室就寝の形態をとるものはほとんど見られず、独立した居間と2寝室といった住み方が主流を占めている。成長した家族では、居間確立のための模様替え・しつらえの工夫が見られるが、住戸計画の新しい方向として、このような能動的適応の芽を伸ばすべきであろう。

(3) タンス類の移動の多さは、居住者の室面積に対する敏感な反応を物語っている。しかし、これらの移動する家具は多く室用途に対してはネガティブに働いており、望ましい形態とは言えない。これが移動可能な家具間仕切りに置き換えられれば、変化への対応としてはより綺麗な形態になると思われる。

以上のような3DKの住生活に対する不適合および住生活の変化の激しさを見ると、住戸の間仕切の可変化に対する要求は強いものと思われる。

なお、住み方の代表的な例を図-1に示した。

## II 順応型住宅モデルプラン

### 1. 順応型住宅の意義

#### 1-1 住生活の現状と問題点

住宅の計画にあたっては、まず第一に生活と空間の対応を考えなければならない。

従来の公共住宅は、昭和20年代にいわゆる「DK型」の原型が確立されて以来、大きな変化はなく今日に及んでいる。しかしその間、社会的環境条件の変化、建設技術の進歩による変化がいちじるしいのみならず、住生活そのものの変化もまたいちじるしい。この結果、生活と空間の対応が崩れてきているといえる。

具体的な問題点を指摘するならば、次の三つの面をあげることができる。

### (1) 住様式の多様化

「DK型」の成立期においては、単に食事の場を寝室(畳の部屋)から分離することが平面計画上の主題であったが、その後の生活水準の向上につれ主題は変化してきた。公団層では、テレビの侵入、家具の増大などの要因から、居間の形成、公私空間分化の傾向が一般的であるが、さらにこれにとどまらず、多様な住様式が展開しつつある。一方、低家賃公営住宅層では、家庭内に職業上の作業や内職がもちこまれ、この面でも生活形態が多様化している。

### (2) 住生活の時間的变化

入居後の居住期間の経過につれて、住要求に変化が生ずる。とくに子供が生まれてから中学生頃までの成長期における要求の変化がいちじるしく、家具類の購入、移動、寝室の移動、子供室の確保、室の用途変更など、大多数の世帯で住み方の上に変化が起っている。

### (3) 個性の埋没

集合の大規模化(大団地、巨大住棟など)、工法の工業化にともなって、住宅の形態が画一化する傾向が見られ、その中で個々の世帯の独自性が失われ、集合の中に埋没しようとしている。

## 1-2 計画の目標設定

以上のような住生活上の問題点を克服するために、住戸計画の目標として次の三点を設定したい。

### (1) 多様性への対応

多様な住様式に対応するために、さまざまな平面を作りうる方式を用意する。

### (2) 変化への対応

生活要求の時間的变化に対応するため、間取りの変化、すなわち内部間仕切の変更の可能性をもたせる。なお、この可能性を発揮するためには、居住者自身によってそれが容易に変更できるものでなければならない。

### (3) 個性の発現

画一化による個性の埋没から逃れるために、住空間に居住者自身によるしつらえの可能性を豊富にもたせると同時に、住戸外へも個性が表れるようにする。

以上の三点を、「順応型住宅」の計画目標とする。これは、居住者の独自の要求ならびにその変化に順応しうる住宅という意味で、順応型と名付けられたのである。

なお、順応型住宅に対する要求は、従来の「規定型住宅」の価値を否定するものではない。居室を畳敷きの和室とし、食事はDK型式のイタノマとする平面型式は、今日広く普及し、親しまれ安定している。大多数の人口は依然としてこの規定型住宅に適応するであろう。

ただ、これに適応しえない層の人々、多様な住様式として発展しつつある層の人々に対して、順応型住宅が準備されるべきである。順応型住宅は今日ではなお実験段階であると位置づけるのが至当である。

## 1-3 順応型住宅の計画の中心課題

先にあげた三つの計画目標の実現のためには、住戸内部の間仕切およびしつらえを、居住者自身の意志によって作りあるいは変更しうるように準備するのが、順応型住戸の基本的な考え方である。つまり、間仕切に可変性を付与することになる。

しかし、順応型といっても、無際限の可変性をもった白紙の空間ではありえない。過度に可変性を高めることは、空間の特徴が失われ、可変性を操作することがむづかしくなり、さらに、居住者のしつらえの意欲が触発されにくいために、かえって順応性は減ずることになる。

したがって、順応型住宅の計画にあたっては、最大の順応性を生み出すように、住戸の可変性の範囲(限度)を定めることが重要である。このためには、次の二つを定めなければならない。

### ① 固定部分の構成

### ② 可変システムの設定

これが順応型住宅の計画の中心課題である。

## 1-4 順応の方式

空間の順応の方式としては、間仕切の変更、部屋の転用、しつらえの順応の三種類が考えられる。

### (1) 間仕切の変更

住戸内の間仕切の移動、取りはずし、あるいは付加により、部屋の数、大きさを調整する。この場合、居住者自身の手により比較的容易に変更しうる方式であることが要請される。

### (2) 部屋の転用

住戸内に異なる質の空間を予め用意し、用途を変更することにより要求の変化に順応する。各空間に明瞭な差異を設けておくことは、転用の効果を高めるであろう。

### (3) しつらえの順応

室内の仕上、家具の配置、装飾など、室内のしつらえを居住者の意志に順応させる。このためには無限定・無性格な空間でなく、ある程度ははっきりした性格(規定性)をもった空間であることが必要と思われる。

これら質の異なる順応の方式を、効果的に組込んで計画する必要がある。どの方式を重視するかにより、平面構成が異ってくる可能性がある。

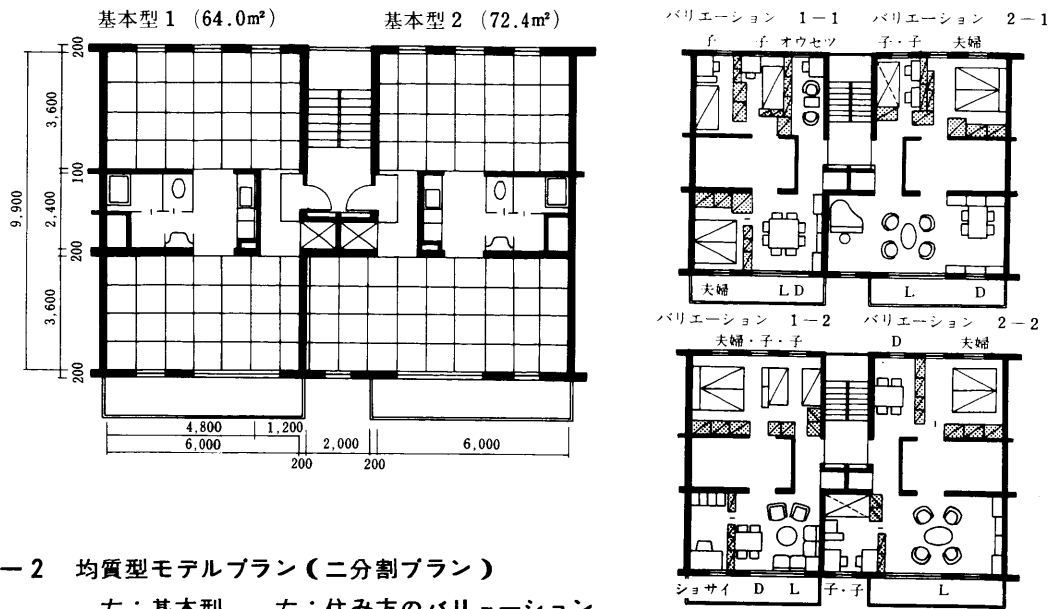
## 2. 均質型と分節型

順応型住宅の計画中心課題は<固定部分の構成>と<可変システムの設定>である。

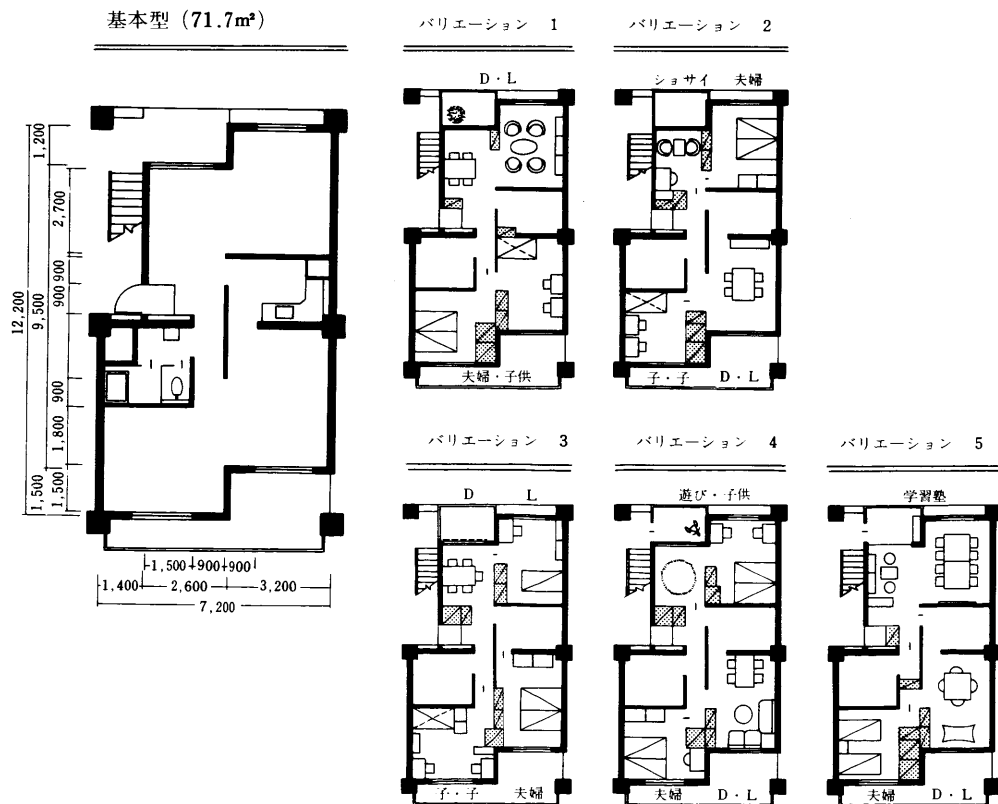
モデルプランの作成にあたって、<固定部分の構成>については、水まわりを固定することを前提とした。

<可変システムの設定>については家具間仕切を前提として考えた。

順応型住宅モデルプランの作成を通じて二つの典型的な考え方が出されたが、それを<均質型><分節型>と



図一 均質型モデルプラン（二分割プラン）  
 左：基本型， 右：住み方のバリエーション



図一 3 分節型モデルプラン  
 左：基本型  
 右：住み方のバリエーション

名付けた。

<均質型>(図-2)は、どこでも家具間仕切が置けるように空間をなるべく均質にしようとする考え方から出されたものである。ただし、固定部分、特に入口、キッチンとのつながり、開口部のとり方によって全くの均質空間というものはありません。住宅の室としての広さも無限定ではありませんし、家具寸法とのコーディネーションのための規制も働く。このような制約の上に成立つものとして均質空間を扱っている。したがって、家具間仕切変更の自由度も無制限ではない。

<分節型>(図-3)は、性格、広さの異なるいくつかの空間に住戸を分節し、居住者の個性に応じた様々な室用途の構成が可能となることを意図したものである。居住者によって空間の質の読み取り方が異なれば、多様な室用途の構成が生まれ、それが外部に対する各住戸の表情の違いとしてもあらわれるだろう。

間仕切家具の扱い方から言えば、<均質型>はモジュールにとらわれることなく家具を移動することが可能な<ズラシ式>であり、<分節型>は家具を置く位置をあらかじめ設定した<ハメコミ式>である。<ズラシ式>では室の広さの微調整が可能である。<ハメコミ式>では家具を設置し易いような細工をしておくことが可能である。

住生活の多様性への対応という点については、<均質型>は室数の調整、室の広さの調整に重点を置き、広さ要求(室数要求)の多様性への対応という意味合いが強い。一方、多様性は広く開放的な居間に対する要求、隔離された寝室に対する要求、コミュニティー志向、プライベート志向のように住生活の質的側面から捉えることもできる。<分節型>はこのような質的側面から見た多様性への対応という意味合いが強い。

生活の経年的変化には量的変化と質的变化がある。室数、室の広さに対する要求の変化が量的変化であり、例

えば子供室の独立による室数の増加、居間家具の増加に伴う居間の拡大化要求等がこれにあたる。質的变化とは、例えば夫婦室と子供室の分離の強化のようなことであり、室の用途変更の多くは質的变化に伴って生ずる。<均質型>は量的変化への対応、<分節型>は質的变化への対応という意味合いが強い。

### 3. その他の順応型住宅

この2つのほかにも、さまざまなモデルプランが考えられ、両者の中間的性格のものもありうる。図-4は均質型で、コの字型に順応空間を設定したものである。図-5は全体が一空間となっているが、中央にL字型の壁を設け間仕切家具を置く位置を限定したものである。このように間仕切が設定されるべく限定された空間を「調整空間」とよび、図ではアミをかけて示してある。図-6は、均質型と分節型の複合型である。また、住み方調査からみれば、居間を確保する型が大多数であるから、順応型とはいえ予め居間となる空間を想定し、空間の凹凸、固定的な壁、居間にふさわしい開口部などを設けておくことは、居間のしつらえを促すには有効であろう。図-7は、そのような居間の核となる場を設定し、なお私室部分との間に面積調節の可能性をもたせたプランである。図-8は、さらに固定的な居間を設け、居間空間の充実を期待したプランである。また、1室は畳を、と望む人は多いであろうから、居間のほかにさらに畳の部屋を1室設け、順応性を子供私室部分に限定するプランも考えられる(図-9)。これは既にほとんど規定型に近づいた型といってよい。

順応型には、以上のようにさまざまな型が考えられる。いづれにせよ、現在はまだ実験的段階であるから、その可能性と性格については、実験住宅の建設を通じて検討していくことが望ましい。

研究主査 鈴木成文(東大 教授)

研究委員 杉山茂一(東京写真大 助手)

深沢大輔(東大 大学院生)

弓掛泰則(日本住宅公団東京支所)

なお、東大鈴木研究室、日本住宅公団東京支所の多数の人々の参加、協力による。

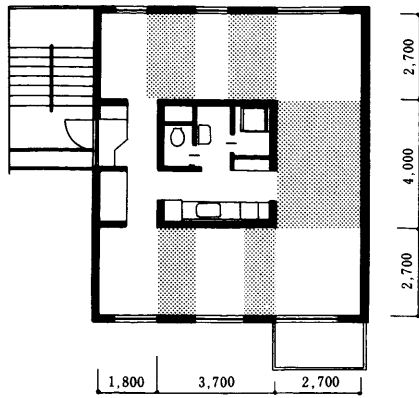


図-4 均質型(コの字プラン)

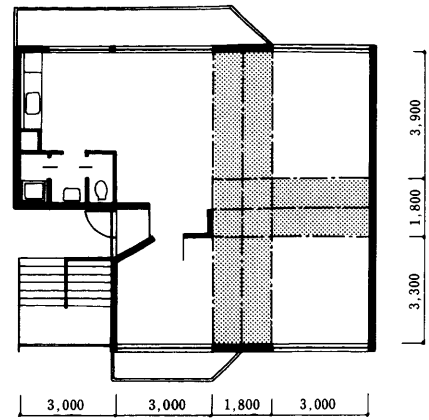


図-5 均質型(一体空間分割プラン)

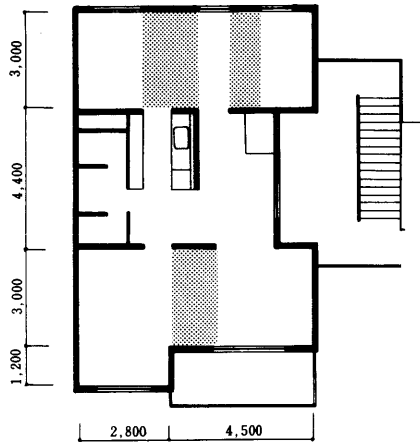


図-6 均質 + 分節プラン

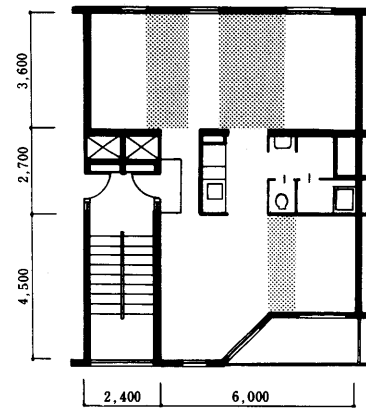


図-7 居間の核設定プラン

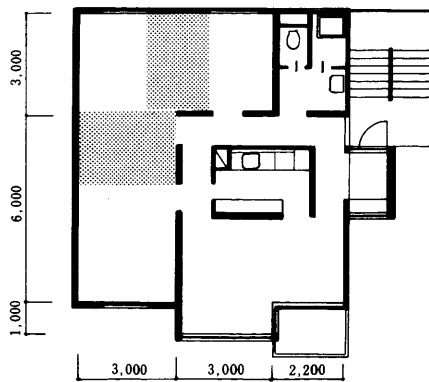


図-8 居間固定プラン

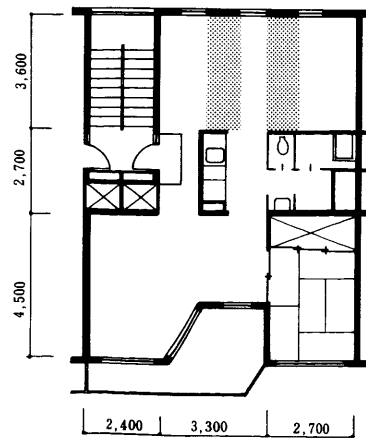


図-9 居間固定 + 和室固定プラン